

図書館蔵書に対する評価は、その量よりも質にあることは言うまでもないが、その質的条件の中にどのような稀観本（きこうぼん）

本館

稀

観

本蔵

所蔵

世間に流布されていない珍しい書物）が収蔵されているのがある。ついで、専門の立場から本館所蔵の稀観本を紹介することとした

の中から

西洋服飾稀観書(18) いわゆる“Journal et Gravures des Modes”について

教授 石山 彰

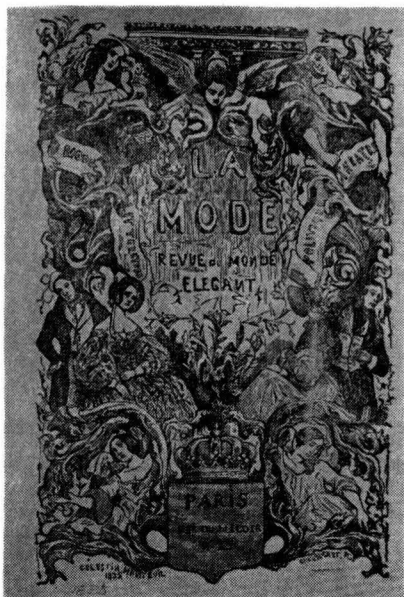
図書館の書庫の稀観本の書棚に行くと、えび茶の背皮で真っ赤な表紙、背にしょうしゃ(瀟洒)な金色の金押し模様の美しい洋書が29巻並んでいる。オクターボ版だから日本の本の大きさでいうとA5版つまり、ほぼ菊版の大きさである。19世紀も第2四半期に属するファッションブックのシリーズで、背文字は首題の“ ”とおりになっていて、他に表題はない。

雑誌はもちろんのこと、単行本であっても、フランスなどのように独自に製本することの多いヨーロッパでは、当然、装幀も個別なのが一般で、その場合、タイトルや背文字が簡略化されたり、全く個人の見解で便宜的なタイトルが付されたりすることがよくある。実は本叢書もこの一味なので、どんなコスチューム・ビブリオグラフィ（服飾文献目録）にも、このタイトルではもちろん、類似のタイトルすら見当たらない。こうした場合は大抵、扉か目次のところに正確なタイトルが記されているのだが、本叢

書にはそれもないのだから始末が悪い。やっと見つけたそれらしい一枚が写真①で、背文字とは似ても似つかぬ書名になっている。La Mode, revue du monde élégant, Paris rue du Helder N° 25. である。

では、このタイトルが絶対なのかという点と必ずしもそうではなく、副題をさまざまに変えながら、そしてまたある年代には発行地も変えながら続刊されていくという、まことに厄介な代物であることが判ってきた。つまり、こうなのである。この雑誌は1829年10月に La Mode, revue des modes, galerie des mœurs, album des salons としてデビューするが、1831年から副題が revue du monde élégant, 同じく1842年7月からは revue politique et littéraire, 更に1851年4月からは revue politique, religieuse et littéraire に変わり、1854年9月15日号まで続く。しかし、同年9月25日号から12月5日号までは一端 revue universelle, journal de l'aristocratie と改名

① フルタイトルと発行地のほか カットの中にモルド・文学・政治・演劇などの文字も見える唯一の扉 一八三六年一月 C・ナントイユのデザイン



② ランテ原画ガーターヌ刻の貴品あるプレート ロンシャン競馬観覧用の午後の服 インド産ビロードに薄い絹のリボン飾り 一八三三年四月六日号



して発行地も rue des Filles St. Thomas 5 に変るが、12月15日号から翌55年1月15日号などは、再び元の副題 *revue du monde élégant* に戻っている。こうして1856年から62年までの最終段階では次のタイトルと発行地に変っている。La Mode Nouvelle, littérature, religion, histoire, beauxarts, sciences, poésie, critique, théâtres, causeries des salons. Paris, rue Luid-le-Grand 21, つまり「新しいモード、文学、宗教、歴史、美術、科学、詩、評論、演劇、社交界の話題」である。こうして副題を変えながら1829年10月号から1862年11月号まで通算33年間連続刊行されたことになる。このことから、タイトルは通称、総括して La Mode, journal des modes といわれているのである。このうち本学所蔵の分は1832年から46年までの14年分であるから、タイトルは次のように記しておくのが適切であろう。

[383.135 M 1~29] La Mode, revue du monde élégant ou revue politique et littéraire, 29 vols. 1829~1846, Paris, rue du Helder N° 25.

「モード、優雅な世界の雑誌または政治と文芸の雑誌」である。エルデ通りはオペラ座近くにある。

3~4か月分の13~18分冊を1回分とし、1巻には通常2回分が合綴されている。1回分、つまり13~18分冊毎に目次が付されているから、構成や内容はそれを見れば一目で理解できる。これによると、週

刊誌で、1835年を例にとると毎週11~16ページ、各週必ず銅版手彩色の美麗なファッションプレート——一時折、精巧なモノクロ石版刷のカリカチュア——が付されており、1回分の合計ページ数は300前後、従って各巻通常600ページ程度、2巻分で1年ということになる。当時の値段はパリで3か月分14フラン、6か月分26フラン、1か年分48フランであった。

前にも述べたように、本誌は1829年10月、ド・ジラルダン (Henri de Girardin) によって創刊されたのであるが、その名声を高からしめたものは一体何であったのか。それは、彼が、当時としてははずば抜けた才能の持ち主であるモード画家ガヴァルニ (Gavarny のちに Gavarny 1804~1866) を始めて起用したからであった。彼は本名をシュヴァリエ (Sulpice Guillaume Chevalier) といい、ガヴァルニの名は、彼がピレネエのある村で始めて展覧会を開いた折、カタログの編集者が誤って村の名と作者名をとり違えたことに始まる。以来、彼のサインは大抵G—I, Gi と記された。本誌での彼の作品は1831年ごろまで続くが、その後は著名なランテ女史 (Louise-Marie Lanté 1789~?) に継承され、優れた彫版師ゲーティース (Georges-Jacques Gatine 1773~1824) と共に本誌の名声を持続することができたからであった。こうして本誌は、第一級のモード誌に数えられている。

③ プレートには時折仮装舞踏服のデザインが登場する。パレロワイヤル劇場の舞台衣装家シオールがデザインしたルネサンス風の衣装 一八三五年一月



④ ランテ原画のルダンゴット二態 左は一列ボタンに綾絹のチョッキ、ズボンは白の混紡地 本誌のプレートは紳士服も秀逸である 一八三五年五月

